

学齡期における低出生体重児の発達障害とオフタスク行動

金川 陽美

【序論】出生体重 1000g未満の超低出生体重児や 1500g未満の極低出生体重児は、学齡期に高い割合で発達障害様症状を示す(金澤ら, 2014)。発達障害様症状がもたらす学習面・行動面の問題は深刻である。発達障害とは診断されていないものの、学習や行動において困難を示す「グレーゾーン」児も多くのいるが、グレーゾーン児に対しての支援は、ほとんどなされていないのが現状である。グレーゾーン児の困難を保護者や学校側が把握し支援につなげるためには、医師の診断が難しい場合でも児の困難を測定できる指標が必要となる。候補となる「オフタスク行動(off-task behavior)」は、課題遂行中に生起する、課題とは無関係な行動である。オフタスク行動は学習場面で観察可能であり、特別な課題や質問紙は不要である。児の学習面・行動面の問題とオフタスク行動の関連が示されれば、オフタスク行動は、児の困難をとらえる有用なツールとなる可能性がある。本研究は、課題場面における低出生体重児のオフタスク行動を観察することで、児の学習面・行動面の問題を評価する行動指標を見いだすことを目的とする。

【方法】本研究の分析対象児は、20XX年から20XX+2年の間にA医療施設において実施された学齡期検診に参加した平均年齢 8.9 歳の低出生体重児 34 名(平均出生体重 776g)であった。発達障害のスクリーニング検査の結果、ASD(自閉症スペクトラム障害)が 17.6%、ADHD(注意欠如・多動性障害)が 17.6%、LD(学習障害)が 14.7%、MD(精神遅滞)(IQ<80)が 11.8%と高い割合で発達障害様症状が認められた。また、発達障害以外の学習面・行動面の問題を測定するために、WISC-4 や Conners 3、CTRS-R、学業評定尺度などが実施された。検査実施中の児の行動が、学習面・行動面の問題と関連しているかを検討するため、心理検査場面の映像記録を用いて行動観察を行った。

【結果・考察】オフタスク行動の生起頻度を発達障害様症状群別に見ると、「注意の逸脱」でのみ ASD 群と LD 群が MD 群より高い生起頻度を示していた。また、対象児を ADHD の有無で分類した結果、「頭部や首を触る」と「もたれる」といったオフタスク行動に関して、ADHD 群は非 ADHD 群よりも高い生起頻度を示していた。SCQ 得点による ASD 様症状は「離席」に正の影響を示した。WISC-4 の指標得点では、処理速度が「以前の問題への言及」に正の影響、ワーキングメモリーが「離席」に負の影響、言語理解は「検査者の手元確認」に正の影響を示した。Conners 3 による家庭での ADHD 様症状やその他の行動問題に関しては、友人/家族関係の問題が「離席」や「椅子の回転」に正の影響を示し、他にも攻撃性や不注意や実行機能の問題が「無関係な発話」、「以前の問題への言及」、「もたれる」行動に正や負の影響を示した。CTRS-R による学校での ADHD 様症状や二次症状に関しては、多動性が「無関係な発話」や「以前の問題への言及」、「離席」、「椅子の回転」、「検査者の手元確認」に正の影響を示し、他にも社会的問題や完璧主義、不安/恥ずかしがり、認知問題/不注意が、「問題文に関する独語」、「頭部や首を触る」、「離席」、「注意の逸脱」などに正や負の影響を示した。LDI-R による学習障害様症状に関しては、「書く」、「計算する」、「聞く」の障害が、「問題文に関する独語」や「以前の問題への言及」、「物に触る」、「注意の逸脱」などに正や負の影響を示した。学習パフォーマンスを表す学業評定尺度に関しては、様々な尺度から「無関係な発話」や「問題文に関する独語」、「以前の問題への言及」、「頭部や首を触る」、「離席」、「椅子の回転」、「検査者の手元確認」、「注意の逸脱」、「参照」に正や負の影響が見られた。以上の分析から、本研究で観察した多くのオフタスク行動が、何らかの学習面・行動面の問題を反映する行動指標になることが示された。特に「以前の問題への言及」と「離席」に関しては、多動性や攻撃性、友人/家族関係の問題など多くの問題を反映する行動指標となりうるということが分かった。(比較発達心理学)